

徳島県小松島市前山遺跡出土埴輪

岡本治代

[Haruyo Okamoto : Haniwa (ceramic funerary sculpture placed on mounded tomb surface) from Maeyama site,
Komatsushima-shi, Tokushima Prefecture]

キーワード：前山遺跡, 埴輪, 古墳時代後期

はじめに

前山遺跡は、徳島県小松島市田浦町前山に所在する遺物散布地である。勝浦川右岸の田野山地北麓に位置する(図1)。前山遺跡では、これまでに、ほぼ完形の盾持人埴輪、石見型埴輪、人物埴輪をはじめとする200点を超える埴輪片が出土しており、その大部分は徳島県立博物館(以下、当館とする)が保管している¹⁾。他県と比較して埴輪の出土数が少ない徳島県において、前山遺跡出

土埴輪は貴重な資料群である。また、近年、前山遺跡周辺では四国横断自動車道(阿南インターチェンジ~小松島インターチェンジ間)の建設等に伴う新居見遺跡、田浦遺跡などの発掘調査が実施されており、古墳時代中期から後期の古墳や埴輪が新たに確認されている。こうした古墳や出土埴輪の性格を把握する上でも、近接地に所在する前山遺跡の埴輪群を分析することは大きな意味をもつと考えられる。しかし、これまで当館が保管する



国土地理院2万5千分の1地形図をもとに作製

- 1 田浦井口(古墳) 2 井口古墳 3 前山古墳 4 前山遺跡 5 神子ノ内古墳 6 山ノ神塚古墳 7 新居見遺跡(山路地区) 8 子安観音塚古墳
9 お子守塚古墳 10 田浦遺跡(子安東地区・西地区) 11 女郎ヶ谷古墳 12 義経の岩屋古墳 13 弁慶の岩屋古墳

図1. 前山遺跡の位置

2021年11月30日受付, 12月21日受理.

徳島県立博物館, 〒770-8070 徳島市八万町文化の森総合公園. Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-Mori Park, Hachiman-chô, Tokushima, 770-8070 Japan.

前山遺跡出土埴輪の図面や写真はほとんど公開されていない状況であった。

そこで本稿では、当館が保管する前山遺跡出土埴輪を分析し、その概要を紹介したい。なお、冒頭で述べたとおり埴輪片は200点を超えており、未だ整理の途上である。本稿では、今後より多くの研究者に本資料が活用されることを重視し、まずは現時点で器種を特定することができたもの、及びある程度の形状を復元できた資料を報告することとする。

1. 出土状況

埴輪の分析を行う前に、前提となる出土状況について検討しておこう。当館が保管する前山遺跡出土埴輪のほとんどは、1962年（昭和37）にミカン畑の開墾中に発見されたものである。発掘調査に伴うものではないことから、当時の写真や図面といった詳細な出土状況の記録は残っていない。こうしたなかで、前山遺跡は古墳に伴わない埴輪集積遺跡もしくは古墳外での埴輪樹立祭祀遺構として紹介されてきた（菅原、1988；徳島県埋蔵文化財センター、2021など）。しかし、前山遺跡の周辺には多数の古墳が存在しており、後期古墳にみられる典型的な埴輪のセットが出土していることから、埴丘削平を受けた古墳である可能性も考慮すべきとの指摘もある（西本、2015）。そこで、当館が保管する埴輪発見直後の行政文書や、埴輪発見の約1か月後に発掘調査が実施された前山古墳の発掘調査報告書（末永ほか、1963）に記録されている埴輪発見者の証言から、当時の関係者たちの認識を確認してみたい。

まず、昭和37年4月16日付け教社第194号「遺跡発見について（報告）」における「現品の処置に関する意見書（副申）」には、「標高約50メートル、面積約7,920平方メートルのうち、西斜面尾根付近3.6メートルの中内から0.6メートル間隔をもって配列され、地下およそ0.45メートルの所から、昭和37年2月4日に」（中略）「盾を持つ人物埴輪」1個を、同月26日には（中略）「人物埴輪」1個、「盾」2個、「円筒」1個、破片多数を、いずれも柑橘を拡張するための開墾中に偶然発掘した」とある。

次に、同文書の「小松島市田浦町出土「埴輪」の概要」においては、「発掘現場は3つの円墳（直径12メートル）があり、4個の埴輪はもっとも北側の円墳の中に埋葬されたもので古墳中期のものと推定される」とある。

また、前山古墳の発掘調査報告書には、「埴輪が置かれている部分の下には、厚さ10センチほどに細かい赤土が敷いてあるから、開墾を進めていっても埴輪が出土する

ことを予知することができる。最も深かった埴輪で地表下60センチ、完好な人物埴輪は頭を東にして30センチの深さで横にねかしていた。また埴輪は20メートル範囲内で点々と出土し、古墳を取まく状態ではなかった。須恵器（提瓶が多い）は沢山出土するが、埴輪の出土する地域に接した南方にだけ出土し、埴輪のある地域内からは出土していない」という発見者の証言が記されている（末永ほか、1963）。

これらは、当時の現地観察に基づく所見であり、行政文書では埴輪が古墳に伴うとする一方で、発見者の証言では「古墳を取りまく状況ではなかった」とするなど、どの程度正確な出土状況を示したものなのか、検討の余地が残されている。ただし、以下で分析する埴輪の性格を検討する上で、念頭においておくべき記述であろう。

2. 先行研究における前山遺跡出土埴輪の位置づけ

次に、前山遺跡出土埴輪に関する先行研究を確認したい。まず、器種については、円筒・朝顔・石見・建物（家）・蓋・鞆・馬・人物（盾持人・馬曳）・翳・大刀があることが指摘されてきた（藤川、1991；河内、2009；栗林、2014）。また、こうした器種構成から、6世紀前半に位置付けられている（藤川、1991；河内、2009）。石見型埴輪については、紀伊地方の資料と形態・文様構成が共通していることから、紀伊地方の系譜を引くものとされる（河内、2009）。製作技法の面では、畿内地域の埴輪にみられる断続ナデ技法・倒立技法が用いられていることから、畿内地域との関係が指摘されている（藤川、1991；河内、2009・2013；西本、2015）。なお、徳島県内では、蓮華谷遺跡（I）・韓崇山古墳群・新居見遺跡でも断続ナデ技法を用いた埴輪が確認されている（藤川、1991；徳島県埋蔵文化財センター編、2021）。

胎土については、板野郡板野町川端遺跡出土埴輪の分析過程で前山遺跡出土埴輪の胎土観察も行われており、雲母、結晶片岩を多量に含むことが指摘されている（徳島県埋蔵文化財センター編、1999）。なお、前山遺跡に近接する田浦遺跡出土埴輪はマイクロスコープによる観察で2種類に、色調を含む肉眼観察では8種類に分類されている（小松島市教育委員会編、2015）。また、新居見遺跡の古代の遺構面で検出された自然流路SR3001から出土した埴輪は、主に片理複合石英類や緑色片岩に特徴的に含まれる緑れん石などの片岩類からなることが指摘されている（徳島県埋蔵文化財センター編、2021）。

また、特徴的な埴輪としてシカ線刻が施された埴輪片が

あることが報告されている（高島，1997）。岡山県法伝山古墳や西の平古墳の出土例との類似が指摘されている。

3. 資料の分析

以下では器種ごとに、法量・製作技法・文様・胎土・焼成といった特徴を述べる。なお、胎土については、いずれも結晶片岩由来の鉱物を含む点は共通していることから、含有量や砂粒の大きさを記述することとする。

(1) 円筒埴輪（図 2-1 ～ 5・図 3-3・4）

図 2-1：口径は 25.2cm に復元される。口縁部から 9.9cm の位置に突帯が一条めぐり、突帯の断面形状は台形状を呈し、他の円筒埴輪と比較して角が明瞭である。外面はタテナデ調整を施し、内面には粘土紐の接合痕と指頭圧痕が確認できる。胎土は精良で、褐灰色を呈する。こうした特徴は、新居見遺跡山路地区で報告される円筒埴輪 34a（徳島県埋蔵文化財センター編，2021）に類似している。

図 2-2：口径は 24.4cm に復元される。外面にタテハケ、内面の口縁部付近はヨコハケ、その下部にナナメハケ及び指ナデが確認できる。胎土は直径 3mm ～ 5mm の砂粒を多量に含み、橙色を呈する。

図 2-3：残存高 20.8cm，底部径は 18.8cm に復元される。断面が角のとれた台形を呈する突帯を 2 条配し、2 段目には円形の透穴をもつ。外面は摩滅しており調整は不明である。内面にはナデ調整を施す。胎土は直径 3mm ～ 10mm の砂粒，小礫を多量に含み，黄褐色を呈する。

図 2-4：残存高 18.2cm，底部径は 20.4cm に復元される。突帯を 2 条もつ。最下段の突帯に断続ナデ技法を用いる。外面は，2 段目，3 段目にナナメハケ，基底部は，外面を板状の工具，内面を指などで抑えて成形した痕跡が認められる。胎土は結晶片岩に由来する直径 3mm ～ 5mm の砂粒を多量に含み，にぶい黄褐色を呈する。

図 2-5：器高が 43.4cm を測り，口径 39.3cm，底部径 14.8cm に復元される。断面が角のとれた台形を呈する突帯を 5 条配し，5 段目に円形の透穴をもつ。器形のゆがみが大きく，胴部は膨らみ，口縁部は外反する。外面の大部分は摩滅しており調整手法は不明だが，基底部にナナメハケ，底部にはハケメもしくは蓆状の敷物の痕跡が残る。内面は，口縁部付近にはヨコハケ，その他の部分はナデ調整を施す。胎土は直径 3mm ～ 5mm の砂粒を多量に含み，橙色を呈する。

図 3-3：シカの線刻のある破片である。胎土は砂粒をわずかに含み，橙色を呈する。

図 3-4：3 と同じくシカの線刻のある破片である。他の円筒埴輪の口縁部が外傾もしくは外反するのに対して、本資料は内湾気味に立ち上がるのが特徴である。胎土は砂粒をわずかに含み，黄灰色を呈する。

(2) 形象埴輪円筒部（図 2-6 ～ 8）

具体的な機種は特定できないものの、人物埴輪等の形象埴輪の円筒底部と考えられる資料である。

図 2-6：底部径は 17.0cm に復元される。底部から 0.8cm の位置に突帯がめぐり、突帯は強いナデと自重によるひずみによって凹線状のくぼみが生じている。胎土は直径 3mm ～ 5mm の砂粒を多量に含み，橙色を呈する。

図 2-7：底部径は 17.6cm に復元される。底部から 2.3cm の位置に突帯がめぐり、胎土は直径 3mm ～ 5mm の砂粒を多量に含み，橙色を呈する。

図 2-8：底部径は 20.9cm に復元される。底部に突帯がめぐり、底部にはヘラ状の工具による沈線がめぐり、胎土は直径 3mm ～ 5mm の砂粒を多量に含み，橙色を呈する。

(3) 朝顔形埴輪（図 2-9）

底部の破片であるが、底部調整を施さないことから、朝顔形埴輪と推定される資料である。

図 2-9：底部径は 17.8cm に復元される。底部に連続する棒状の圧痕が遺る。胎土は、基本的には砂粒を少量含むが、部分的に直径 10mm をこえる小礫も含まれる。明黄褐色を呈する。

(4) 建物形埴輪（図 3-1・2，図 4-1・2）

寄棟造の建物の底部（図 3-1・2），鯉木（図 4-1・2）の破片である。なお、現時点で図化できていないものの、基底部に 2 条の沈線をもつ壁面と思われる破片も存在する。

図 3-1・2：寄棟造の建物の底部である。三角文がめぐり、胎土は直径 3mm ～ 10mm の砂粒，小礫を多量に含み，明黄褐色を呈する。1 と 2 は庇の長さや湾曲の角度が異なっており，別個体と考えられる。

図 4-1・2：鯉木の破片と考えられる。屋根との接合部に剥離痕が確認できる。胎土は精良で明黄褐色を呈する。

(5) 大刀形埴輪（図 4-3・4）

柄部の鈎金につけられた玉飾りの破片と考えられる。3 条の沈線を施す。胎土は精良で橙色を呈する。

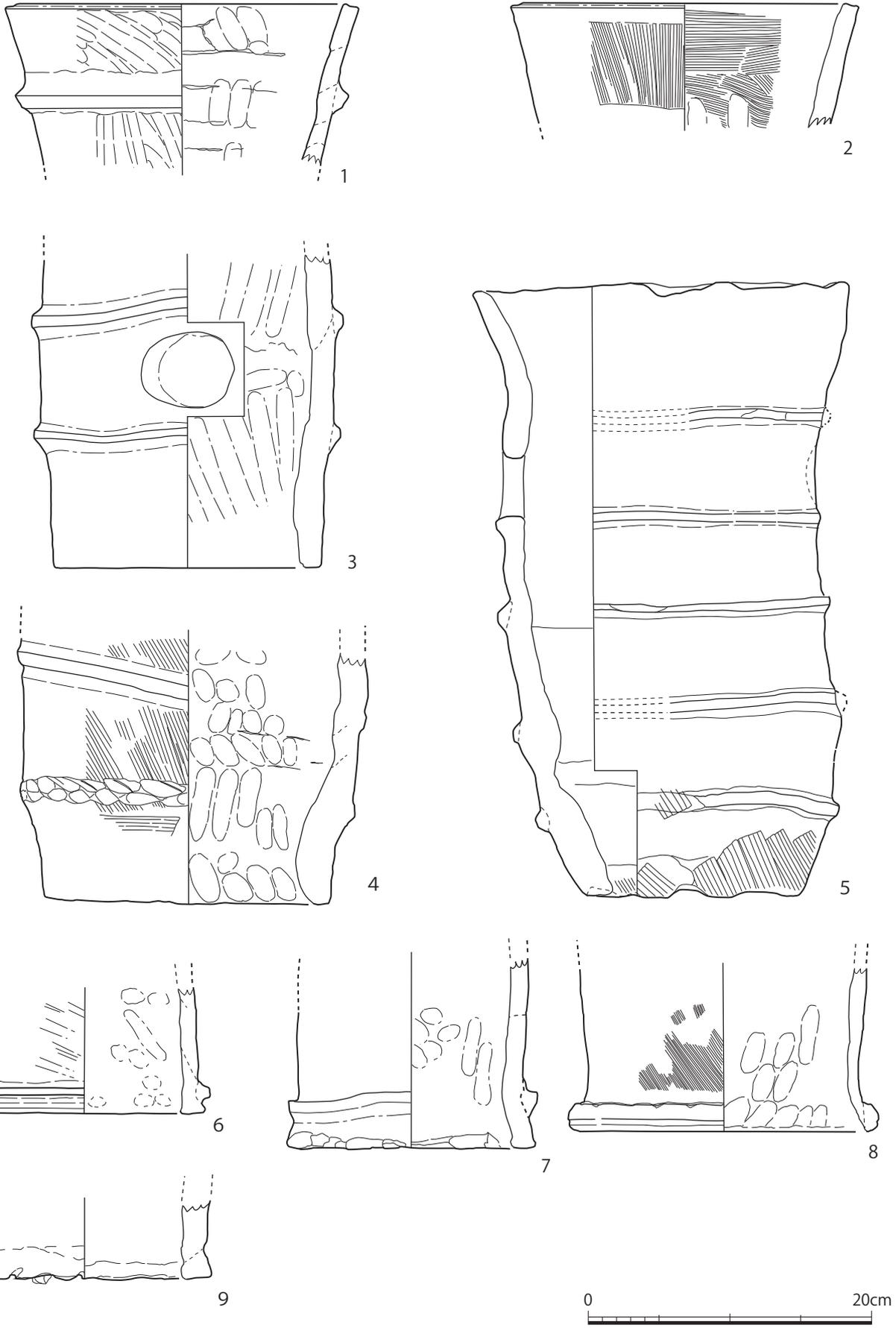


図2. 円筒埴輪 (1～5)・形象埴輪円筒部 (6～8)・朝顔形埴輪 (9)



図3. 建物形埴輪 (1・2)・シカ線刻埴輪 (3・4)・朝顔形埴輪 (7)・人物埴輪 (5・6・8)

(6) 馬形埴輪 (図 4-5・6)

目の周りから面繫にかけての破片である。胎土は直径 1mm ~ 5mm の砂粒を多量に含み、明黄褐色を呈する。

(7) 人物埴輪 (図 3-5・6・8, 図 4-7・8)

ほぼ完形の個体 (図 3-8), 角髪 (図 3-5), 腕部 (図 3-6・図 4-7・8) の破片がある。胎土は直径 1mm ~ 10mm の砂粒, 小礫を多量に含み, 橙色を呈する。

図 3-8: 馬曳人と推定されている (河内, 2009)。底部径 21.0cm, 器高 70.5cm である。頭頂部には空気穴をもつとともに中央部がくぼんでおり, 頭部を正面から見るとハート形を呈する。頭部両側面には剥離痕があり, 本来は図 3-5 のような角髪が付されていたものと推定される。また後頭部にも垂髪が付されていた可能性もある。右腕はやや肩を張って湾曲する。左腕部は欠損しているが, 図 3-6 と接合する可能性がある。腰帯を腹部で交差させる。円筒部には, 突帯を 3 条配するとともに, 円形の透穴を一段目と二段目に穿つ。倒立技法により成形されている。

図 3-5: 角髪の破片である。下端が膨らんだ板状の形状で

ある。

図 3-6: 左腕の破片である。8 の肩部に差し込む形で接合できる可能性がある。手首には帯状の剥離痕が残っている。

図 4-7: 肩部から腕部にかけての破片である。図 3-6 と同様に, 筒状に成形された肩部に腕部を差し込んで接合する。

図 4-8: 腕部の破片である。手の部分を欠くが, 図 3-6 と同様の形状と考えられる。

(8) 蓋形埴輪 (図 5・図 6)

文様の異なる個体が, 少なくとも 3 個体存在する。いずれも胎土は直径 3mm ~ 5mm の砂粒を多量に含み, 橙色を呈する。

図 5: 立飾部の破片である。A 面・C 面には 1 条 ~ 3 条の線刻で綾杉状の文様を施す。B 面には 3 条の線刻で下弦状の文様, D 面には長楕円形の円弧文を施す。

図 6-1: 立飾部の破片である。表面には 3 条の水平な線刻とそれに直行する線刻をもつ。裏面は 3 条の線刻を平行に配する。

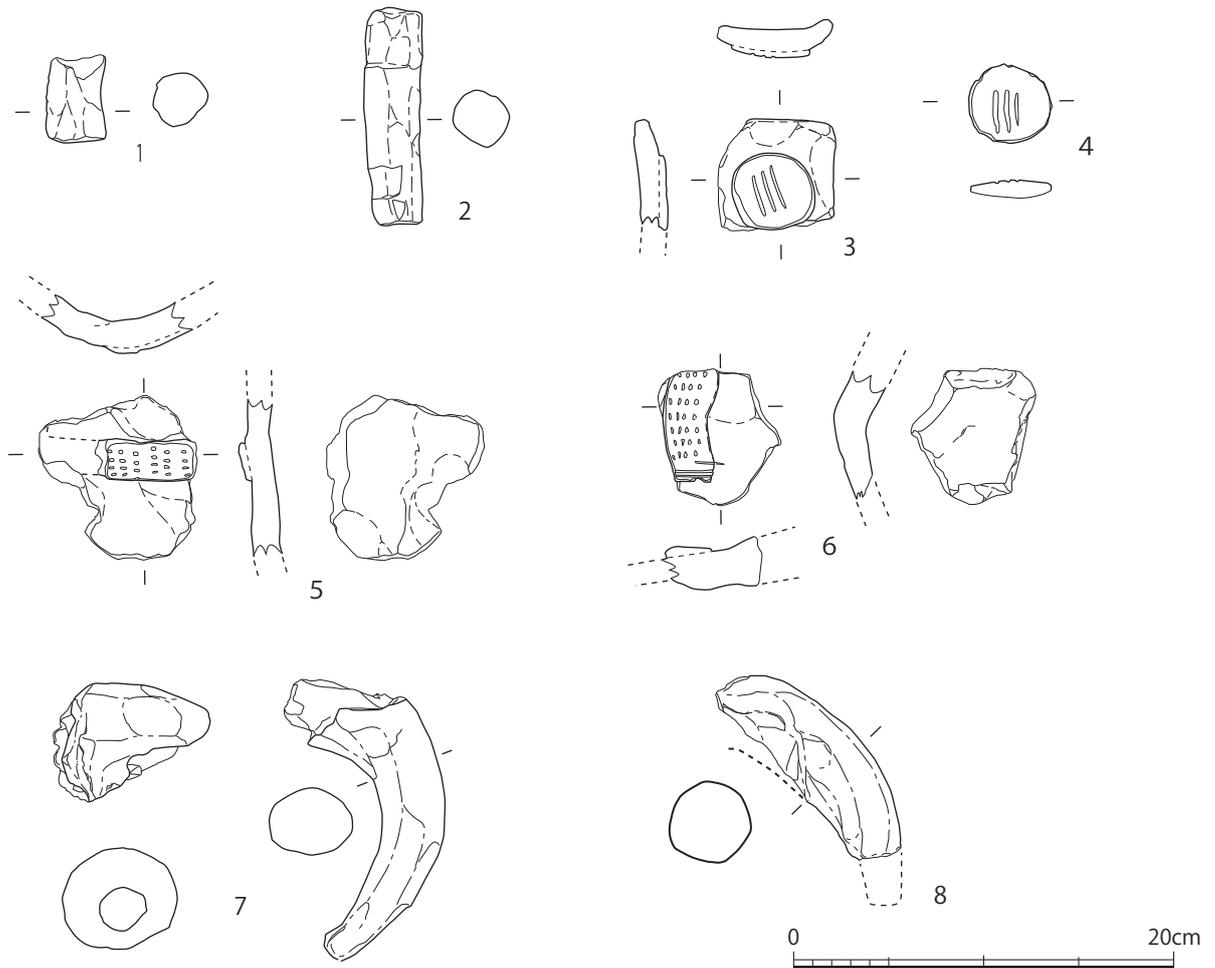


図 4. 建物形埴輪 (1・2)・大刀形埴輪 (3・4)・馬形埴輪 (5・6)・人物埴輪 (7・8)

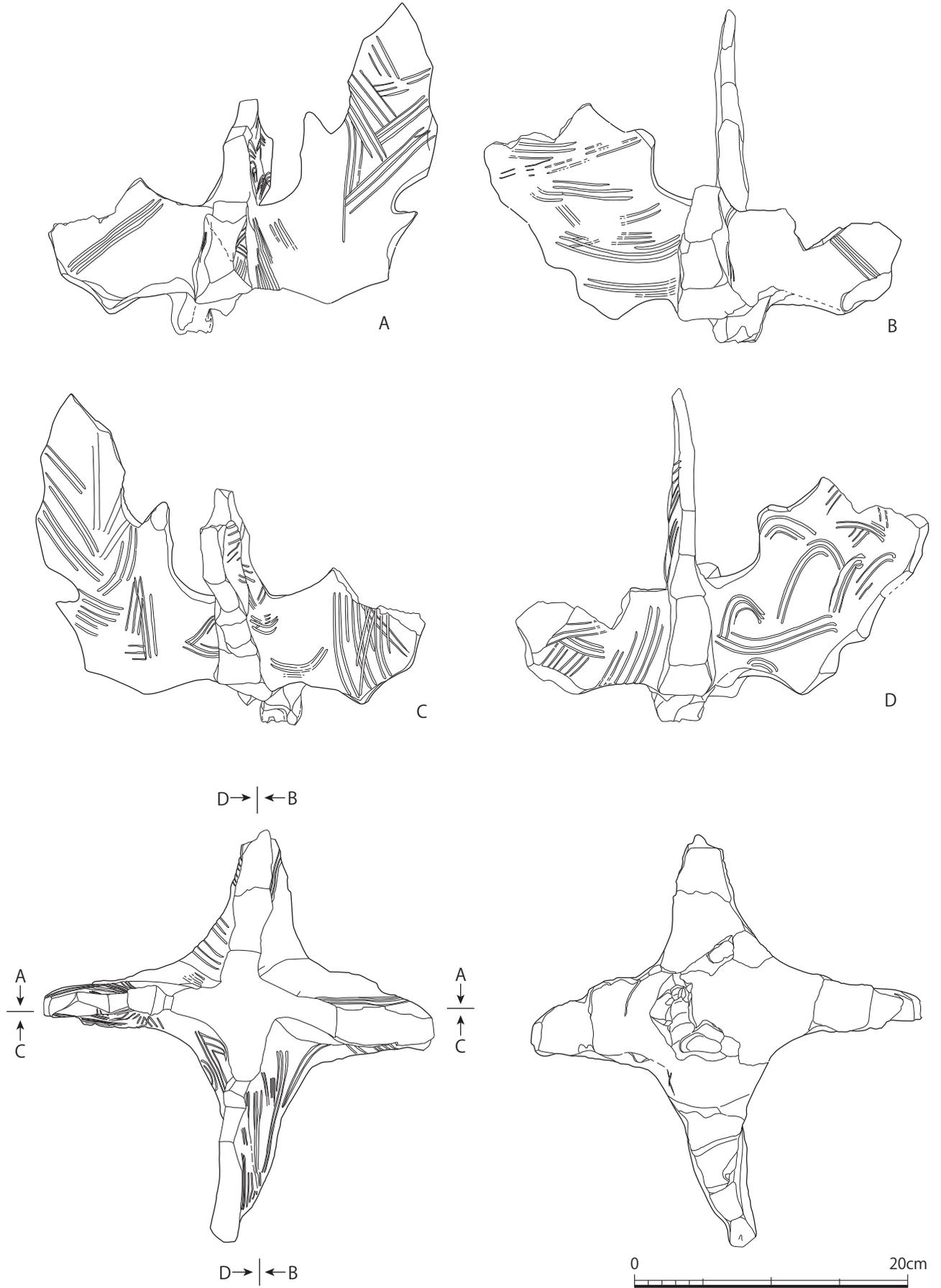


図5. 蓋形埴輪

図 6-2：立飾部の破片である。表面には日輪状の文様，裏面には 3 条の屈曲する線刻をもつ（藤川，2018）。

図 6-3：軸部の破片である。

(9) 鞍形埴輪（図 7-1～5，図 8-1・2）

飾板部及び円筒部の破片である。いわゆる奴舩形の鞍形埴輪である。胎土は直径 1mm～10mm の砂粒，小礫を多量に含み，橙色を呈する。

図 7-1（図 8-1）：飾板部の破片である。中央に 7 本の矢を線刻で描き，その両端に 2 条の列点文，側縁部に 4 条の線刻を施す。

図 7-2～5：飾板部の破片である。1 の矢柄の下部に続く部分と考えられる。格子状の線刻文の下部に，2～3 条の線刻で連続する円弧文を描く。

図 8-2：筒部から飾板部にかけての破片である。奴舩形で，和田一之輔による分類の B 類（和田，2011）に相当する。底部径 20.3cm，残存高 67.8cm である。7-2 等と同様に，格子状の文様体の下部に連続する円弧文，さらにその下部に 3 条の線刻を施す。円筒部の脇の背負板には，線刻で放射状の文様を描く。円筒部は 3 条の突帯をもち，一段目と二段目に円形の透穴をもつ。三段目には，粘土の接合痕跡があり，倒立技法により成形されたことがわかる。

(10) 盾持人埴輪（図 7-6）

右側の盾部下端から円筒部の接合部の破片である。2 条の線刻で格子文を描く。胎土は精良で，茶褐色を呈する。破片資料ではあるが，現在京都国立博物館が所蔵している盾持人埴輪と，胎土，色調，文様構成が類似することから，

盾持人と判断した。なお，京都国立博物館が所蔵する個体は 3 条の線刻で格子文を表現するが，本資料は 2 条であることから，別個体と考えられる。

(11) 石見型埴輪（図 7-7～9・図 8-3）

ほぼ完形の個体（図 8-3）と，飾板部の破片（図 7-7～9）である。胎土は直径 2mm～5mm の砂粒を多量に含み，橙色を呈する。

図 8-3：底部径 22.0cm，最大幅 45.0cm，器高 110.0cm である。河内一浩分類（河内，2009）による c 手法，和田一之輔分類（和田，2011）による 4 分割線刻型の個体である。中央帯には線刻で格子文を描き，その上下段に円弧文と直線文を組み合わせた幾何学文を描く。最下段は 3 条の線刻で 6 単位の文様を描くとともに，周縁部は 3 条の線刻で縁取る。円筒部には 3 条の突帯を配し，一段目と二段目に円形の透穴をもつ。倒立技法で成形されている。

図 7-7：最上段右端の破片である。

図 7-8：2 段目の左端の破片である。円筒部との接合面に斜め方向の刻目を入れている。

図 7-9：円筒部から飾板部にかけての破片である。

(12) 盾形埴輪（図 7-10）

盾部左下端の破片である。4 条の線刻で放射状の文様を描く。胎土は直径 3mm～5mm の砂粒を多量に含み，橙色を呈する。

(13) その他の形象埴輪（図 9）

ある程度の形状を復元することができたものの，器種を

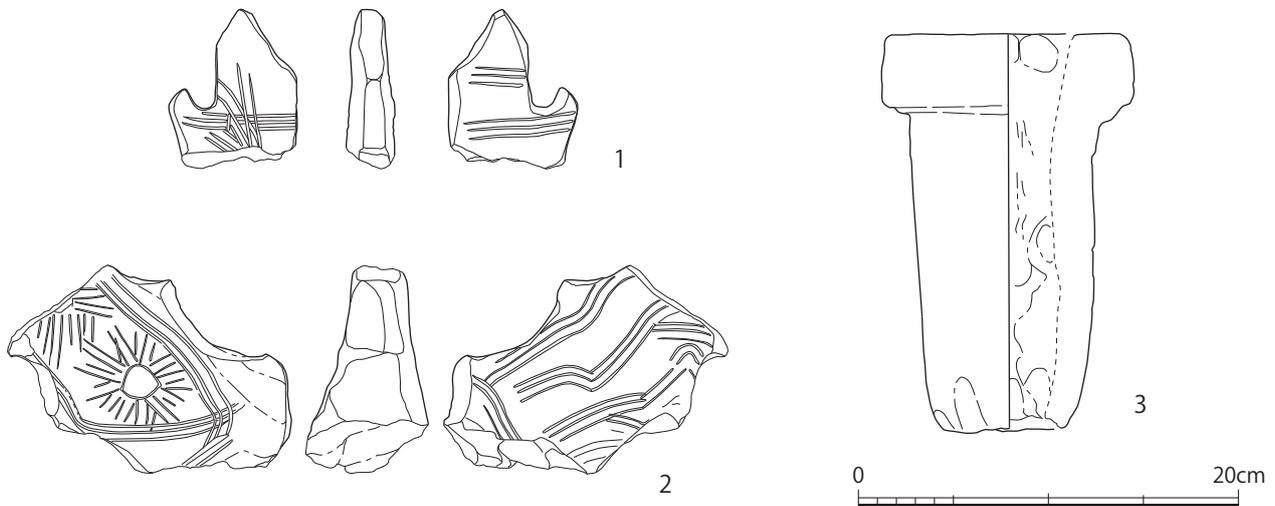


図 6. 蓋形埴輪

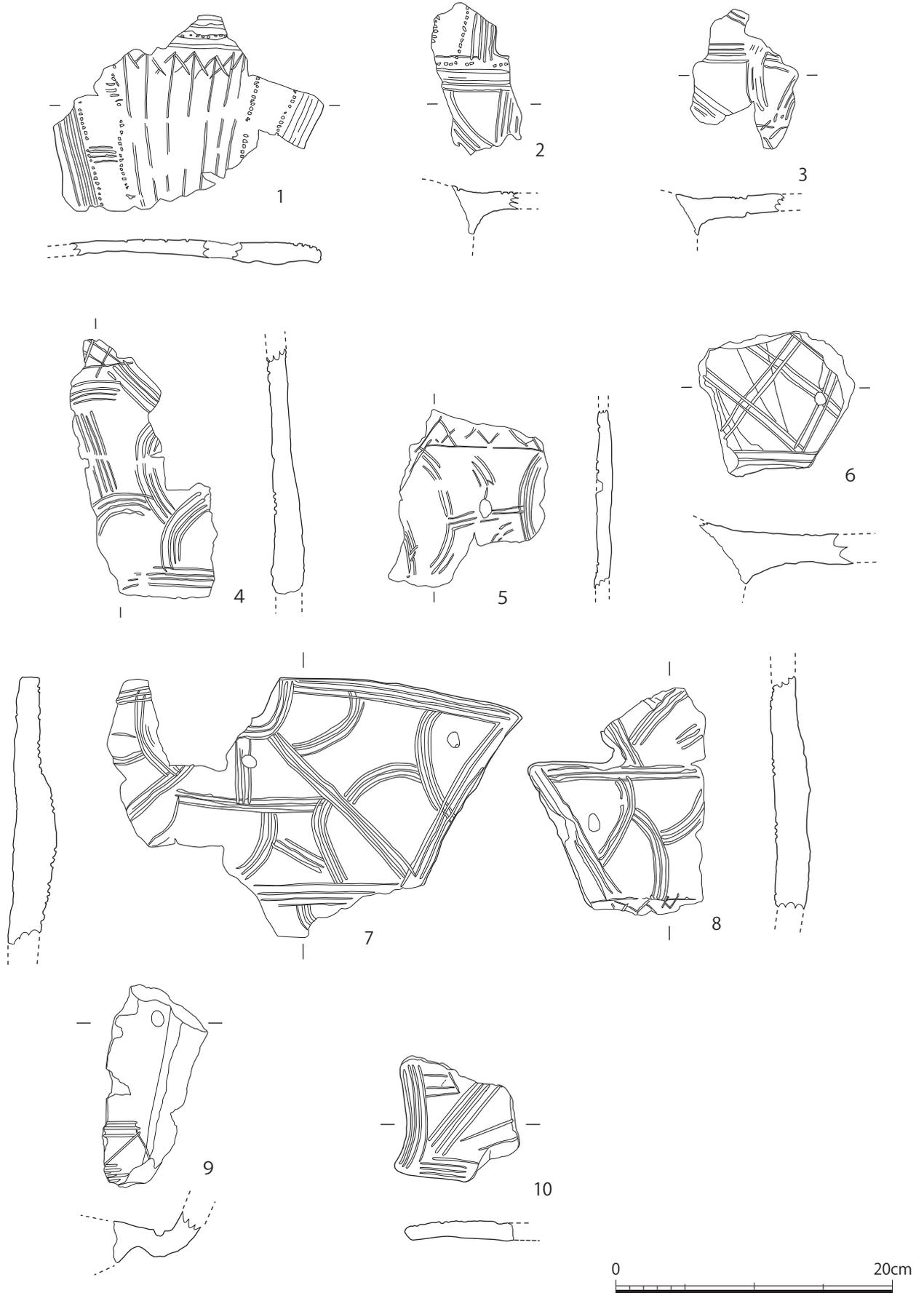


図7. 鞍形埴輪 (1～5)・盾持人埴輪 (6)・石見型埴輪 (7~10)



図8. 鞍形埴輪 (1・2)・石見型埴輪 (3)

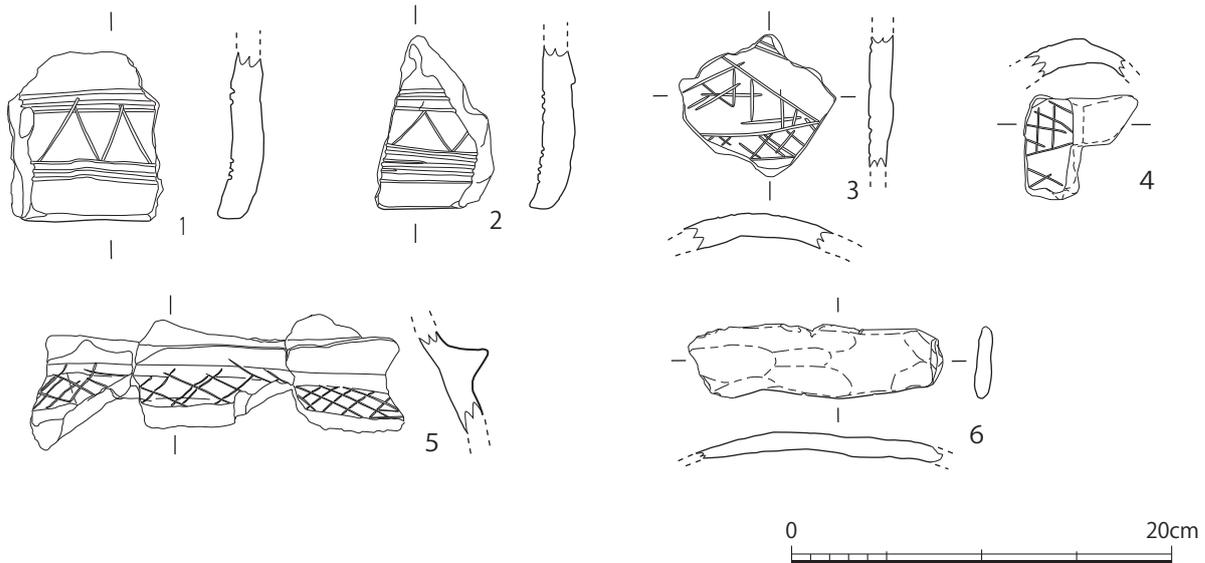


図9. その他の形象埴輪

特定できなかった資料である。いずれも直径 1mm ~ 5mm の砂粒を多量に含み、橙色を呈する。

図9-1・2：下端が内湾する板状の破片である。三角文の上下段に三条の線刻をもつ。残存部の左端に円孔をもつ。建物形埴輪の底部である可能性も想定される。

図9-3：やや湾曲する薄手の破片で、格子文と×字状の文様をもつ。

図9-4：格子文をもつ帯状の破片である。

図9-5：斜格子文をもつ。馬形埴輪の鞍部分の可能性はある。

図9-6：やや湾曲する薄手の破片である。人物埴輪の裳裾部の可能性はある。

4. まとめ

以上のとおり、当館が保管する前山遺跡出土埴輪は、円筒埴輪・朝顔形埴輪・建物形埴輪・大刀形埴輪・馬形埴輪・人物埴輪（盾持人・馬曳）・蓋形埴輪・鞍形埴輪・石見型埴輪・盾形埴輪で構成されていることが確認できた。従来、翳形埴輪が存在する可能性も指摘されていたが、現状では確認できていない。また、先行研究において指摘されていたとおり、円筒埴輪には断続ナデ技法、人物埴輪や石見型埴輪といった円筒部をもつ形象埴輪には倒立技法が用いられており、畿内地域との技術的な関係をみてとれる。なお、石見型埴輪については、紀伊の系譜を引くことが指摘されていたが、それ以外の器種には紀伊の埴輪と共通する要素は認められない²⁾。

胎土・色調に着目すると、図化できていない資料も含めた大部分の資料は、結晶片岩由来の鉱物を多量に含む橙色～明黄褐色の色調を呈するものである。その一方で、図2

に示した円筒埴輪や朝顔形埴輪は、それとは異なる胎土・色調をもつとともに、多様な技法で製作されている。また、形象埴輪については、盾持人埴輪のみ茶褐色を呈する。こうしたことから、当館が保管する前山遺跡出土埴輪には、複数の生産地で生産されたものや、時期差のある資料が含まれている可能性が想定される。

おわりに

本稿では、以上のように当館が保管する前山遺跡出土埴輪の概要を示した。先述のとおり、未だ資料整理の途上であり、当館には本稿で紹介したもの以外にも数多くの破片が保管されている。今後、より多くの研究者にこれらの資料が活用されることを期待したい。

注

1) 後述するとおり、前山遺跡出土埴輪の大部分は1962年にミカン畑の開墾中に発見されたものである。その際の出土資料の大部分は当館で保管しているが、ほぼ完形の盾持人埴輪は、現在は京都国立博物館が所蔵している。また、石見型埴輪のうち1点は、当館から小松島市教育委員会に移譲されている。

2) 河内一浩氏のご教示による。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、下記の皆さまにご指導・ご協力いただきました。ここに記して深謝いたします。

飯田悠衣・植地岳彦・岡本和彦・河内一浩・高島芳弘・西本和哉・藤川智之・古谷 毅 (50 音順・敬称略)

参考文献

- 藤川智之. 1991. 徳島県の埴輪に関する 1, 2 の問題. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島県埋蔵文化財センター年報 2, p. 105-110, 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 藤川智之. 1993. 人物埴輪の語る阿波の古墳時代. 鳴門史学, 7: 29-36.
- 藤川智之. 2008. 阿波における埴輪の受容—大代古墳形象埴輪の復元成果から—. 真朱, 8: 19-26.
- 藤川智之. 2009. 最盛期の埴輪群—渋野丸山古墳出土形象埴輪をめぐって—. 一山典還暦記念論集刊行会, 一山典還暦記念論集 考古学と地域文化, p. 479-486, 一山典還暦記念論集刊行会, 徳島.
- 藤川智之. 2018. 日輪状線刻をもつ埴輪. 同志社大学考古学研究室, 実証の考古学—松藤和人先生退職記念論文集—, p. 333-344, 同志社大学考古学シリーズ刊行会, 京都.
- 廣瀬 覚. 2011. 西日本の円筒埴輪. 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆. 古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み. p. 173-186, 同成社, 東京.
- 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎. 1992. 古墳時代の研究 第 9 巻 古墳Ⅲ 埴輪. 243 p. 雄山閣, 東京.
- 河内一浩. 2009. 阿波における石見型埴輪の受容. 一山典還暦記念論集刊行会. 一山典還暦記念論集 考古学と地域文化. p. 469-478, 一山典還暦記念論集刊行会, 徳島.
- 河内一浩. 2013. 西日本における紀伊型埴輪の分布—埴輪からみた紀氏の航跡—. 第 3 回海の古墳を考える会. 学術研究集会 海の古墳を考えるⅢ—紀伊の古代氏族と紀淡海峡周辺地域の古墳—発表要旨集. p. 51-58, 海の古墳を考える会, 和歌山.
- 川西宏之. 1978. 円筒埴輪総論. 考古学雑誌, 64 (2): 1-70.
- 小松島市教育委員会. 1964. 小松島市古代文化のあと. 10 p. 小松島市教育委員会, 徳島.
- 小松島市教育委員会. 2015. 新居見遺跡・田浦遺跡. 174 p.

小松島市教育委員会, 徳島.

- 栗林誠治. 2014. 勝浦川流域における前・中期古墳の動態—小松島市田浦前山古墳及び周辺遺跡出土遺物について—. 青藍, (10): 77-82.
- 西本和哉. 2015. 徳島県小松島市前山遺跡出土の石見型埴輪. 真朱, (11): 51-55.
- 西本和哉. 2017. 古墳時代中期の大型古墳築造と埴輪生産—四国地方の事例から—. 中四国前方後円墳研究会, 中期古墳研究の現状と課題 1 広域編年と地域編年の齟齬, p. 31-45, 中四国前方後円墳研究会, 徳島.
- 岡山真知子. 1985. 徳島県. 埋蔵文化財研究会, 第 17 回埋蔵文化財研究会 形象埴輪の出土状況, p. 123. 榎原考古学研究所内 第 17 回埋蔵文化財研究会実行委員会, 奈良.
- 菅原康夫. 1988. 勝浦川右岸の遺跡. 菅原康夫, 日本の古代遺跡 37 徳島, p. 208-212, 保育社, 東京.
- 末永雅雄・森浩一・島 五郎. 1963. 前山古墳. 25 p. 徳島県教育委員会, 徳島.
- 高島芳弘. 1997. 小松島市前山遺跡出土のシカ線刻埴輪片. 博物館ニュース, (28): 4.
- 徳島県埋蔵文化財センター. 1999. 金泉寺遺跡・川端遺跡. 183 p. 徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 徳島県埋蔵文化財センター. 2021. 新居見遺跡 (Ⅱ) (古墳時代・古代篇). 460 p. 徳島県・徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 和田一之輔. 2006. 石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相. 考古学研究, 53 (3): 69-89.
- 和田一之輔. 2011. 形象埴輪の編年と画期. 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆. 古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み. p. 201-212, 同成社, 東京.

図版出典

- 図 1: 国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図をもとに作成
 図 2, 4~7, 9: 北條ゆうこ, 原多賀子が実測, 岡本が製図した. (ただし図 7-10 は岡本が実測・製図)